



「都市の気候変動と異常気象 —猛暑と大雨をめぐる—」

藤部文昭 著

朝倉書店, 2012年4月
155頁, 2900円 (本体価格)
ISBN 978-4-254-16771-9

本書は「気象学の新潮流」シリーズ(新田 尚, 中澤哲夫, 斉藤和雄監修)の最初の本である。著者は気象統計学の専門家でありながら、誰も気がつかない現象に着目し、巧妙な統計解析によって、ゆらぎの中に隠されていた気象の実体をあぶり出す。気象学の時流とは一線を画し、独自の気象統計学を構築した。このような藤部式研究スタイルを以前から注目していたが、論文ではなく、解説書で登場するとは、うれしい驚きである。

本書のテーマは、かなりジャーナリスティックである。キーワードは、異常気象、ヒートアイランド、猛暑、大雨。どれも私たちの生活に身近で、社会的関心が高い。しかし、学問的には、どれも難しい問題で、クリアカットの議論がしにくいテーマである。

気象の特性は、スケールによって様相が異なる。グローバルな気象は規則性が卓越するが、スケールが小さくなるにつれてゆらぎが大きくなり、不規則性が目立つようになる。人間スケールの気象はゆらぎが大きい。藤部式研究スタイルでは、スケールが小さく、ゆらぎが大きい現象を研究対象にすることが多い。その特徴は、注意深い統計解析によって、説得力のある結論を導く点にある。そのような著者が、社会で注目されている異常気象にどのように切り込んでいくのか、大いに期待して読んだ。

全体は以下の9章から構成される。

1. 明治時代の気候と気象災害
2. 地球温暖化の実態とメカニズム
3. ヒートアイランドの性質
4. 都市気候をめぐる問題
5. 気候変動の信頼性に関する問題
6. 夏の局地風と広域ヒートアイランド
7. 猛暑の実態とその長期変化
8. 気候変動と降水の変化
9. 都市が降水に与える影響

本書の第1の特徴は、過去の事例、過去の研究を丹念に集めていることである。新聞・テレビでは、もっぱら、現在と近未来に関心が限定されているが、もっと広い視野で眺めると、気象のどのような特性が浮かび上がってくるのか、時間軸上のパースペクティブを与えてくれる。「おわりに」で、著者は「昔話が多すぎるかもしれない」と謙遜しているが、過去を丹念に探ることは、ゆらぎの大きな気象を正しく理解するのに有効な方法である。第1章で平成の異常気象を明治時代の異常気象と比較し、明治時代にも、最近の「ゲリラ豪雨」を凌駕する豪雨被害があったことを明らかにする点などに、その特徴が現れている。

本書の第2の特徴は、統計に対する慎重な扱いである。いいかげんな統計が間違った結論に達することを戒めている。面白い例を紹介しよう。大阪で、1週間の気温最高値が何曜日に現れるか、50年間の統計を取ったものである。日曜日から始まる1週間で統計を取ると、

日	月	火	水	木	金	土
467	346	331	325	307	381	450

という結果になる。週初めと週末に最高気温が出現する傾向は明らかである。ところが、水曜日を週初めとして同じ統計を取ると、

水	木	金	土	日	月	火
436	387	317	327	330	348	462

という結果になる。何と、やはり週初め(水曜日)と週末(火曜日)に最高気温が出現する傾向が現れるのである。その理由は本書で述べられているが、気象統計の奥深さを教えられた。

最近の社会的関心を反映させてか、地球温暖化に1章を割いている。因みに、最近、出版された「二つの温暖化—地球温暖化とヒートアイランド」(甲斐憲次編著, 成山堂書店, 2012年3月)では、グローバルな温暖化とローカルな温暖化を比較して論じている。本書と比較して読むのも面白いだろう。

本書は、一般読者を対象としており、文章は明快で読みやすい。コラムと注が充実している。異常気象を理解するための必読書になると思う。

(放送大学 木村龍治)